



新小岩幼稚園・未就園児クラス

アドバイザー 猪之鼻晴子

『 きょうだい格差 』

先日の父母会に生まれて1か月の3番目のお子さんを連れてきていたママを見て、かつての自分の姿を思い出していた。小さな子ども3人を連れていつも大荷物を抱えて歩いていた。

一人目の時は、冬に生まれて暖くなるまで人混みには出さなかったのに。下の子どもたちは生まれた時からすぐに抱っこでどこにでも連れて行かれる。

一人目は静かに寝かせて、家族が新聞紙をめくっても「今寝ているから」とたしなめた。下の子は寝ても誰かに起こされて出かけている時だけよく眠った。

一人目にはチョコも飴もしばらくあげず、お菓子をあげたがる両親に注意した。下の子どもには、父母会の時に黙ってもらうために、ラムネを携帯して口に入れた。

一人目は一日に何枚も写真を撮り、アルバムが何冊にもなった。先日5人目の子に「小さい時の写真を学校に持って行く」と言われたが、その子だけで写っている写真がなく、探すのに苦労をした。アルバムはない。

生まれた順番でずいぶんと扱われ方が違う。成長をじっと観察した長男の一年は長かったような気がする。「首がすわるのはまだか」「歩くのはまだか」「もうこれをたべてもいいのかしら」下の子どもはいつの間にかたくさんのことが出来るようになっている。「もう自分で食べられるんだ」「もう自分で着られるんだ」「もうハサミ使えるんだ」あつという間に成長してしまっている。もっとゆっくりでいいのにと思う。

大切に目と時間をかけて育てたはずの子はそれが負担だったかもしれない。手を抜いて、雑に育てたはずの下の子どもはそれが自由だったかもしれない。どれが正解かということはないのだろう。

上の子どもやひとりっくに親があげるもの。それは重いかもしれないけれど、真剣さ。下の子どもたちに親があげるもの。それは適当のようだけれど、経験値。

ただ、いつも一番上の子どもについて反省している気がする。「あんなこと言っちゃったな。」「あんなに厳しくしちゃったな。」初めての子育てで間違えてばかりだったような気がする。くよくよとそう話すと、92才まで幼稚園に月に1度来てくださった亡き久保田浩先生がいつもこう言われた。「みんなそうなんだよ。だから遺産は最初の子に全部あげなさいよ。」「それくらい、みんなまちがえているし、反省するのだから。」と。

渡すような遺産はないけれど、反省だけはしようと思う。久保田先生はこうもおっしゃった。「下の子どもは得するね。おこごとが千分の一でしょう。」「だから、お兄ちゃんお姉ちゃんに少しくらいいいじめられてもいいんだよ」と。本当に下にいけば行くほど、親の呪縛から逃れている。6番目にいたっては、「ママ、甘すぎるよ。」と5人から総攻撃を受けている最中である。